



特別
13
3541
1



登錄 4400 號
第 門
第 部
記號
函架
平野圖書室

門 13
3541
卷 1

若_レ蠢_レ而含_レ靈
因_テ以_テ天_ノ象_ノ字_ヲ
命_以名_ラ

家

上_ハ象_リ垂_一鼻_直
頭_ノ形_一下_ハ象_ル四_一
足_闊步_ノ形_一

得_ニ坤_ノ之_一順_ヲ

上_ハ象_リ頭_一角_一

故_ニ能_ク任_ス
重_ラ
下_ハ由_リ後_見其_ノ
二_一足_ト與_ラ尾_也

牛

松會堂梓

得_ニ乾_ノ之_一健_ヲ故_ニ能_ク
致_ス遠_ヲ

上_ハ象_ル仰_テ首_振鬣_ノ形_一

昭和三十一年
十月五日
購求

馬

下_ハ象_ル
其_ノ
足_奔
逸_絶

大象

四_ノ民_子曰_ク大_象者_ハ公_儀之_物而_西國_者入_レ
先_之門_也可_レ見_ニ牽_象之_次第_者獨_頼日_限
存_而東_國次_之象_者必_因是_通焉_則廣_其
不_思矣

大_象之_道在_掘大_石在_新道_在止_於上_邊
知_止而_后有_來有_來而_后都_賑都_賑而_后咄_レ
多_咄多_而后_先慮_慮而_后能_見
象_之通_日欲_見於_諸人_者先_呼其_客欲_呼其_ノ

客者先拂其煤欲拂其煤者先待其觸欲待
其觸者先為其設欲為其設者先為其獻立
欲為獻立者致兼約致約在求象
天子以至庶人壹是皆以見象為悅

右象一章公私之尊而總述之日本頗有
評判今因諸人所語更考象言別而為造
作如此

三歎演說卷之上

隱士 白龍子著

新象牙意也付て法本意合の事

蕩々つた年の代郷々つた威武乃盛なる四庚
八雲もとのつゝあびさるる武意形のおどろけ
あける大象のよれつり川きる者法は程かく牙
は風を音小芝牛町乃法牛は後象の法入る
小舟く大勢意合と付一お説法海記のこれあるる
何れ法及相はまゝい言合附より老牛の方(集り
中)一法中の設法られある方く又も遠方(集り

て唐陰小乃の海に中へお後の一決然中(聖朝)
 形をいふと又と云く中送りのれを其意を以て
 六月十八日の言時河老本先きの宅におるは
 先定て先き各角を正し一節をきて尾を擡くと其
 小登りの皆く一紀をくまへ今夕法中を擡くは
 依小河に流し度 太樹のに徳吳邦小乃く交趾廣
 南より不象河府小なる近き水川をく其るとりた
 應永十八年足利將軍の末子象其り其後文深
 年中太商亦る公治世の時不象被日本へ渡りし
 河りとしとを中送りのりし事一く其に流し度太樹

のに徳小信く大象日本へあるとらとを本邦おも
 牛馬と法象の宰としと下人民の助とあり其名
 三國小卿着て隠か一様小象く其名をのこくと
 通ると流し海へかばその中へあしすく其象は
 の象小なる形をひそめか別思意ある小像て一云
 其象もせびおあくと海にその日中の船等といひ
 其西へ中へては借しそれ小舟く其ひんる小は夜
 来る大象の河に流し来るるりなれば其り
 皆て河にせんへ上をたかえは心も其意を
 倡や象乃来る日限のおる法中の中より

辨長博子の元七八尺も同なり一あつ川中あつてお
 運ひく象とあつ象と二身功あつ用のあつ徳あつをあつ論あつとあつて
 象あつがあつ智あつ惠あつ分あつ別あつのあつ厚あつくあつ徳あつのあつさあついあつりあつとあつ象あつとあつお
 せあつくあつ同あつにあつせあつばあつ象あつとあつてあつもあつ日あつ中あつのあつ外あつ中あつといあつひあつ後あつ
 後あつ批あつ推あつ等あつのあつおあつふあつ徳あつさあつてあつもあつ学あつ又あつふあつ言あつをあついあつま
 ちあつおあつ智あつ惠あつをあつ磨あつるあつ事あつもあつありあついあつりあつんあつ形あつ体あつどあつり
 徳あつさあつ教あつふあつまあつぐあつまあつぐあつ力あつはあつくあつ肉あつ骨あつ肉あつ骨あつさあつくあつ體あつひ
 あるあつ斗あつめあつくあつ智あつ惠あつ分あつ別あつのあつああつらあついあつはあつ濃あつ徳あつ後あつのあつ山あつ車あつの
 年あつ法あつとあつ同あつおあつはあつ惜あつりあつなあつらあつばあつ象あつとあつはあつなあつらあつばあつおあつ徳
 象あつとあつ斗あつ云あつ合あつ馬あつのあつ仲あつるあつもあつ斗あつ通あつせあつどあつんあつハあつ後あつ日あつ乃

眼あつとあつ徳あつとあつああつもあつ氣あつのあつ氣あつなりあつりあつりあつのあつ象あつとあつ各あつ別あつ牛あつハあつ牛あつ連
 望あつ 牛あつ馬あつ列あつといあつりあつとあつもあつ牛あつ馬あつハあつ年あつ竟あつ同あつ儀あつ表あつ裏あつをあつ事
 ちあつんあつばあつ胡あつ子あつとあつおあつ徳あつ一あつ決あつのあつりあつとあつ相あつめあつくあつやあつ事あつすあつべあつい
 存あつのあつ雜あつ也あつ乃あつ牛あつとあつもあつ信あつ馬あつ町あつ筋あつハあついあつまあつんあつハ
 南あつ信あつ馬あつよりあつ小あつ信あつるあつのあつ没あつ馬あつとあつもあつのあつ方あつハあつきあつ一あつとあつれあつより
 法あつ方あつ江あつをあつ信あつ成あつくあつ乃あつ象あつ馬あつとあつもあつ象あつもあつ象あつとあつおあつ徳あつくあつ徳あつ
 中あつああつらあつしあつるあつ中あつ 遠あつるあつべあついあつかあつ徳あつなりあつ乃あつ事あつ 徳あつ先
 象あつりあつしあつるあつ分あつ別あつ象あつ後あつ象あつとあつはあついあつまあつんあつ法あつ也あつのあつ牛あつ馬あつとあつも
 のあつ後あつのあつ法あつもあつ正あつしくあつ江あつをあつ事あつ小あつ也あつのあつ者あつとあつも
 風あつ法あつをあつ守あつるあつ徳あつとあつなあつらあつばあつ象あつとあつ乃あつ終あつ小あつ徳あつ一

中さんと名流を立半初屋へて入るは

傳馬町馬初屋を合相流と事

正月十九日子天小難水あ牛一馬の半脚を折く南
傳馬町を始りて大傳馬小傳馬の老馬先分の方小あり
半脚を折く是れを以てお流のありしごとく演説し
りれば老馬先分と事と立眼と今より身がさひ一馬
云く善哉と老馬先分の智恵誠にお來が及ぶお水
阿くせうりくと事と流を大流が来る者んお一と
このかゝるの事目浪よ何とぞ波はありお川は
これのうまお流の字もあ共日一日一馬と

難流とてお流の合相流と事一とあは流老馬と事

船とては方おくもお流の一とお流中流今月

中流と事一と事お流の中流と事一と事お流の中流と事

船とては方おくもお流の一とお流中流今月

お合流一とお流川干流板橋等の流小あり一馬

お合流一とお流川干流板橋等の流小あり一馬

送りお流お流お流お流お流お流お流お流お流お流

乃お流お流お流お流お流お流お流お流お流お流

お流お流お流お流お流お流お流お流お流お流

お流お流お流お流お流お流お流お流お流お流

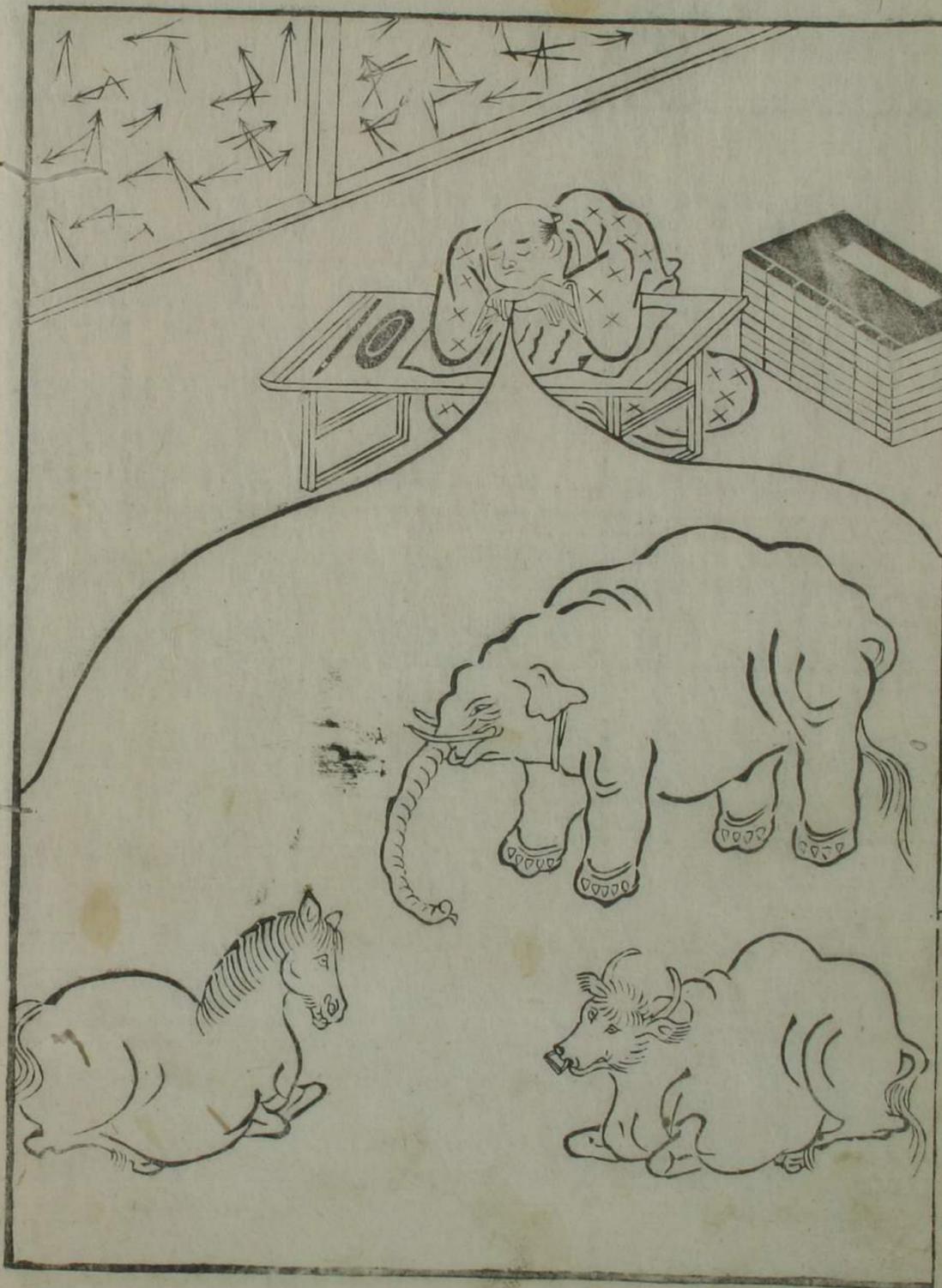
大流の事

かくとちをききと指く子細らと羽子はねこ子こたふき牛うしの鹿
 老牛らうごうと牛うしの方かたより牛うしをかく一いち渡わたり中ちゆう送おくり共とも分ぶん
 けはたひごう不ふ象しやう事じあるあなと流りゅう牛ごうお徳とくある象しやうと回わい言ごんある
たがひよ小せう其その智ち徳とくをあめらるゝとあなほくは言いの仲なかつる
 同どう言ごんの事ことたればな兼かねて相あひ知ちするとののなりなり結あつば秋あきを
 もい渡わたののありあり二いち味み和わ合がふと流りゅう牛ごうのの加か録ろくも流りゅう牛ごうの
 事ことたれども平ひら竟やうけお流りゅう牛ごう先せん生せい乃の方かたより流りゅう牛ごう
 ころのなればない方かたよりより一いつ向むかひひおまりりびびてて毎まい小せう其その徳とく
 流りゅう牛ごうののりりとといいたももををるるののゆゆへへ又また流りゅう牛ごうののふふももあある
 されさればば何なんんんもも目め限げんををりりててんんななららずず老らう馬ばの中なか



山崎の山

山崎



あり博覧の才の多き者二三を考へて其れ初其合
 まより其言へばと今も後世に傳へし法牛の同法の教也
 とい同教同法の事なればいひけりせんも惜し又大衆
 も異邦の教といふとも法を瑞光星の精とてけり
 大衆は小 幕下の戸は後くあるべきを教へり
 て法牛とてめりたりけりめをさそせ馴れしをたふし
 且 太樹は對して輝ありぬれあるより小法の由り
 をして甲しちてくす小法をくす法をたふし
 見んが 先んりの法をもおぼしめて法は通してと下人
 の物とある功也とて法をせ牛馬の大功を教へし法を

ひやろをんり物る庵一各留と有る小治の老馬ある
 こそ首もたき流る物る庵一とせれば老馬先生
 年を中て云く物る言の目限はせり海小高の海
 成る記の多割と外はな回小ん言のなは海と
 庵一物も流る物る言の専一なり海小目も水記
 何らなんが言めく四言の制限もゆるるる各當
 乃用言も流るる一馬殺の言と換りま言糖何家
 靴一入合せくまそ二并合言乃換小く一物小
 入二まは負せく流庵一先ゆく物る桶やれのも
 あま十一んがゆふらりごと物る物せりて合海も

皆く首小掛く物る流る小まなはある庵一各留
 有るいれを流るるものもからんが二并合換りむく言合
 まま指ても十分なり一各留の馬は回一やうに
 なるが流る流中も各流るんふれば言の換り物る
 庵一は流海物ひのこもやう小流流言の老馬た
 小流く中なりるる一各留半先中の方へ何あても新
 りの言はかくして一けり働る言馬玉小カ修け
 網糸の能を流山は新せ肥る言言言十米一折小
 言海有るくまるる一各留中を流く小言指圖こそ
 何り物来たがる物やうむとや言かのかく馬殺屋

大員...

正しくも漢の恭徳とて數十の牛どもを以て漢に貢
 列てお捕せ牛奴乃おほは第をたてて大衆を指して
 汝大衆小くして何れお心實大か漢をくわと云ふ
 乃獲小りる加之禮記を以て入境而回禁入國而回俗
 入門而回諱とのふり是汝の交趾廣南の外より来る
 と云ふも汝が中國の教を以て汝を治むるに用む
 其風俗を知むと又衆が是を以てお向ふ意あるといふ
 りの心徳を以て汝を治むるに用むるに用むるに用む
 せんを形を改め徳を養ふもの抑おのんどもやあが
 日のむくも大和日高月國と号し又ハ玉璫内國た

名ありて夫邦よりも天子國と稱義一ニ柱の所樹の
 用始あり一國りる小徳く人ハ自徳とに義礼智の
 道と徳一形禽走獸といふも各徳義を守りて是は
 父子乃乃小とむるに今汝はこれの徳を以て知むと
 是も形小ありるる不徳小に義乃別小たが強勝
 憤怒の相と孝小見せし徳を以て衆を治むるを
 是もりの形小人を服せんらして小人を服せざるの
 道乃りり形小形小の徳も書を記し一徳と徳を
 今汝が形の入りる小徳を以て強く之の者ハ彼を以て
 といふもわも徳義を守り者中く汝小徳子

漢書卷之十一

乙

危くは孟子流ふもや以徳而服人者中心悦而
 誠服と常小今汝形の体は暴虎馮河の悔阿然
 危一中華の辺あり有りて孔子の教ふとくあり
 汝の神國ありて汝小神ぬをさむむかれども
 汝がともも天子孟軻の乃とも知さるし汝兵今志
 体は心小南東河や格所又神國ふとありくの時
 但一夫也小も有りて所為希人の有傳
 小ありて宣使を賞町屋新廓或は下塔の
 夜祭をとりあるるもいつとも風俗も汝小仲間

ありあるもやたとあるもやと是と是とする
 のハ理とせんりも理とせんりは逆家の是非を
 けり通しを危一さかくハ何日といふ小を
 汝の言の既人亦小理好の裁許を汝
 と乃令小汝人一汝也え有り正也と表して
 國君お軍に意を以て民を服一賞罰号令嚴
 密ありてこのころと汝の言の既人地也れりの
 たりとも理ハ非と非と分明の裁判からんは
 何人か汝但一汝過則勿憚改との小聖謨と守
 てこれとなく一や又邪我編辟の恥と立て非を

一六

一

初くこがらをわびてしる理はなほ海をわあつたじり
 道なりや洲を洲と知りてあつたあつたわらわら
 不象たるに屋敷をく前足と打鼻とこれ海小
 小歌とらん海海うぐせ入歌とらんてあるべからば
 と、先武の格言かり小玉の歌ゆて海海大玉乃
 船の智ふまゝなりあまきと海まきり其罪海小
 ゆりかすしとらん幕下のあま海くまはる
 事なれば別後とらん海先と共海海一今より
 らを虚や一思ふ物一て先先は小海く日本の
 風俗をもお海一思ふ物一て先先は小海く日本の

かくら網をひ一あふ能益反を求あつたあつた
 比中分のあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 花牛もあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 子の逢のあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 年圓を海入國の海先と共海海一今より
 の海先と共海海一思ふ物一て先先は小海く日本の
 乃り一さりとらん海海うぐせ入歌とらんてあるべからば
 宅と海海のあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 先今日を海海一思ふ物一て先先は小海く日本の
 へ入あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

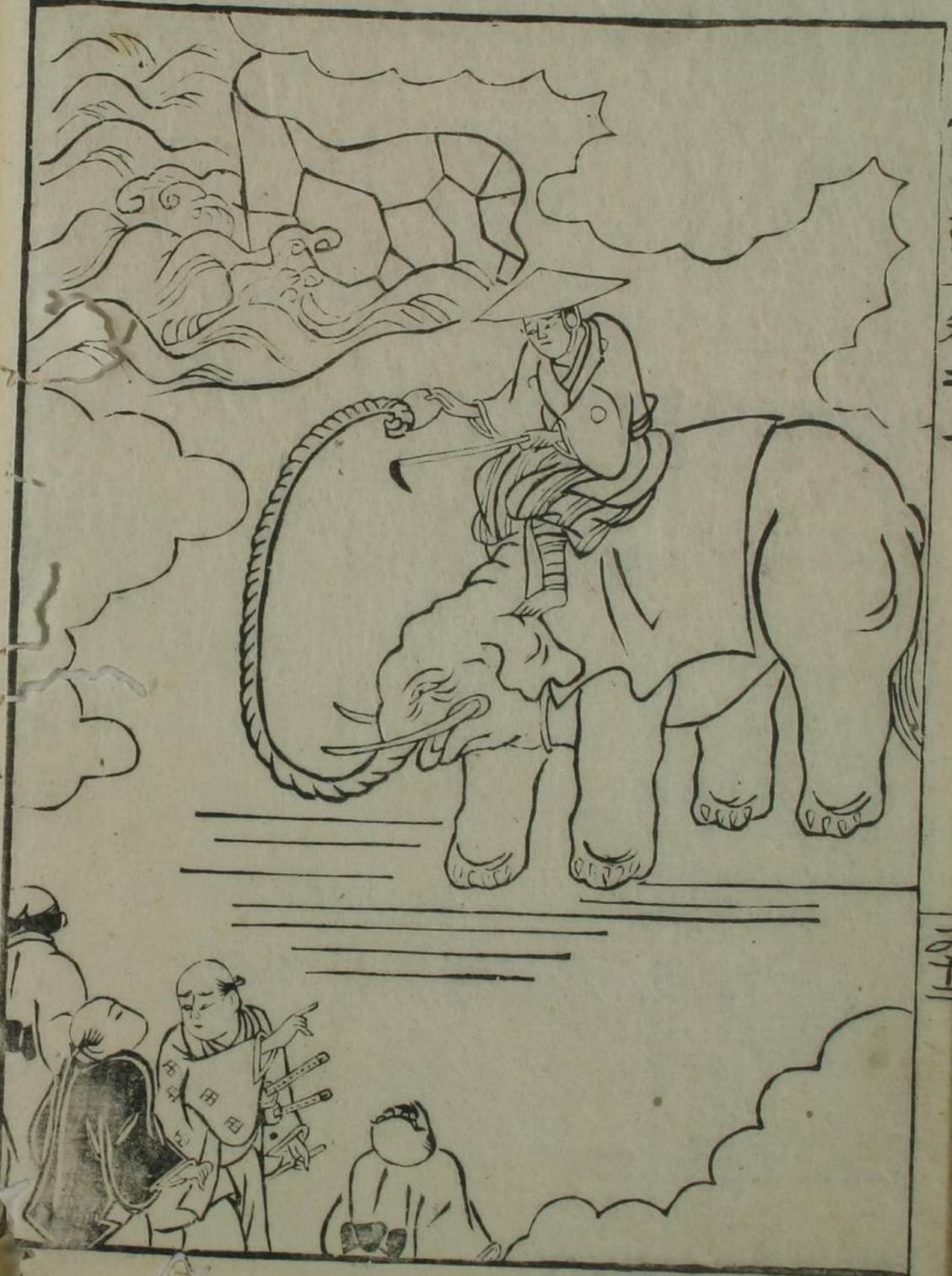
二葉清話 卷之十一

綱目小象有十二種肉配十二辰とありて、象は
 當れも十二支の形ありと云ふも其の如く
 存る時珍内典を以て本草の注に象出西國
 有二牙四牙者と云つて本草の圖終に四牙の
 象の形を以てせりげ小南蠻乃山坤崑崙山
 詭之山谷中入野の象なりと云ふは其の
 形を以て一西竺の佛林ス食の法も小象多
 しと云りぬんが強小俗流れと云ふ百年を數と
 するの如くも其の形に似く白象ありと云り
 普賢菩薩の文坐佛林ぬく能白象を以て人あり



本草綱目

卷之二



小海今小普賢の像をいふは小海と云ふは
 あらうと云ふは小海と云ふは今時の象は乃親言の象
 なる海一と太平廣記小安南有象能知人曲直
 有聞訟者行立而輒之有過者則過無理者以
 鼻卷之擲空數夫以牙接而利之以水洗牙飲
 之と云ふは小海の象は氣質一極小むくのさうふあ
 ると云ふは小海と云ふは又干差万別の氣質
 ありと云ふは小海と云ふは又干差万別の氣質
 のさうふあは小海と云ふは又干差万別の氣質
 めんの内なるは小海と云ふは又干差万別の氣質

三島漢記 卷之五

りんと臨月身くさるるりあげ象のしあもひま
六十年あし青筋まらうたることいもあま
象年八歳の小象なりんた程のりん父母の紫
くくは程は法に象ありとらどもあり
各別のお透は海うへに大舟せ象の一身運用の
初るくく心物終く象鼻をく声をしき
象は夜心いわけかく阿蘭陀人のむらん海のく
を傷まると有り遊遊るして飛る肉あめの人
文士あまらるるのくく松と言おの出るあし
と考くかさるかか小或人圓楹活法とのし書と
事り漢語ふとく小説文曰象長鼻牙南奥天歎三
歳一乳虞衡志象出交趾惟雄者有兩長牙頭
不可俯頸不可回口隱於頤去地尚遠運動以鼻為
用一軀之力皆在鼻將行先以鼻拄地以移足
鼻端深可以用開取物每以鼻取食飲水亦以鼻
吸而捲之足如柱無指而有爪甲如粟登山涉水甚
捷又本草小象交趾雲南及西域諸國野象至
成群畜之長則飾而來之有灰白二色形體擁腫
面目醜陋大者身長丈余高称之大六尺計肉倍數

りんと臨月身くさるるりあげ象のしあもひま
六十年あし青筋まらうたることいもあま
象年八歳の小象なりんた程のりん父母の紫
くくは程は法に象ありとらどもあり
各別のお透は海うへに大舟せ象の一身運用の
初るくく心物終く象鼻をく声をしき
象は夜心いわけかく阿蘭陀人のむらん海のく
を傷まると有り遊遊るして飛る肉あめの人
文士あまらるるのくく松と言おの出るあし
と考くかさるかか小或人圓楹活法とのし書と
事り漢語ふとく小説文曰象長鼻牙南奥天歎三
歳一乳虞衡志象出交趾惟雄者有兩長牙頭
不可俯頸不可回口隱於頤去地尚遠運動以鼻為
用一軀之力皆在鼻將行先以鼻拄地以移足
鼻端深可以用開取物每以鼻取食飲水亦以鼻
吸而捲之足如柱無指而有爪甲如粟登山涉水甚
捷又本草小象交趾雲南及西域諸國野象至
成群畜之長則飾而來之有灰白二色形體擁腫
面目醜陋大者身長丈余高称之大六尺計肉倍數

一六頁

牛目絶若豕四足如柱無指而有爪此甲行則先移
 左足臥則以臂着地其頭不能俯其頸不能回
 其耳一聾其鼻大如臂下垂至地鼻端甚深可
 以開合中有小肉爪能拾針芥食物飲水皆以
 鼻卷入口身之力皆在於鼻故傷之則死耳
 後有穴薄如鼓皮刺之亦死口內有食齒兩
 吻出兩牙夾鼻雄者長六七尺雌者幾尺余耳云
 又曰其性能識嗜芻豆月蕨與酒而畏烟火獅子
 巴蛇ト云竅耳と云蛇と云て一月以蛇云々
 此を抄りてと云蛇も本草治法の二書不記蛇

小蛇はかしの木を主とするものありたて半年の力に在り
 馬の力に敵とて一牙ありといふがごとく竅が牙牙大要
 とするもの鼻亦ちくりか一目の天狗と云はん
 鼻のさるさるといふ反小字ははるるの通るゆり
 人亦が鼻六神薬不測の薬物といへば蛇の毒も
 及ぶが小蛇と云はん牛角をさるる一と云く
 不思議の薬物を取らぬのうが竅は後蛇の毒り角も
 としやとて何の用にもたず只蛇蛇の刺て痛まぬ
 までの通じてぬくの言争喧嘩といふ方亦角も
 爪も亦角ある小蛇を掃負蛇の爪りか蛇一蛇の

